

## 新生活への出発——幸福なる生活への序曲——

「生長の家」ではわれわれ人間は皆神の子であるという。われわれが神の子であるとは、各人は「天照大御神」を各自の魂の底に包蔵しているということである。言い換えれば皆が天照大御神の御子であるということである。では、われらは今日から神の子らしく朗らかに生き、各自に宿る天照大御神を岩戸を開いて導き迎え奉り、この大御神の子たる実をあらわし、われわれは太陽の子だという実相を現実にあらわそうではないか。陰鬱にふさぎ込んで明るさを失ってしまうことは心の天の岩戸を閉じてしまうことである。どんな善人でも陰気が心の中に籠っては太陽の魂が閉ざれているのであるから、本当の善人だということはできないのである。本当の善人は心が明るくならなければいけないし、いつまでも暗を見つめる心を捨てなければいけないのである。禍いを転じて福とするのが日本精神である。死んでも死なないのが日本人であった。伊邪那岐命が、その子迦具土神を斬り給うたとき、その御刀につきたる血からも、殺されました迦具土神の頭からも、胸からも、腹からも、陰からも、左の手からも、右の手からも、左の足からも、右の足からも、神々が生まれ給うたと『古事記』にある。日本人にとっては一つの「死」は多くの「生」への始め

であった。「死」さえも明るく見るのが日本精神であったのだ。

## 第三章 生きる道の座談会

谷口——それもけっこうですが、宗教というものは、お経や聖書の講義の中にあるので、ありません。むしろ、お経や聖書には真理が書いてある。だからはなはだありがたいのです。しかしその解釈にいたっては、その人、その人のサトリによっていろいろに解れるのであります。親鸞聖人と日蓮上人とはいずれ劣らぬ名僧でありながら、釈迦のお説きになりました仏法を全然ちがうように解釈された。親鸞聖人が「ただ念仏さえとなえればほかの行は何一つせいでよい」と言われると、日蓮上人は全然反対に「念仏など称えていると無間地獄へ墮るぞ」と言われた。どちらもえらい名僧で学問は衆に秀でていいる。どちらもお経の一字一句の意味が解らぬという人ではない。それだのにお経の説き方は全然別になった。だからお経の一字一句がわかったとて、本当のサトリが得られるにはきまっています。日蓮上人の説き方が正しいか、親鸞聖人の説き方が正しいかは、日蓮以上、親鸞以上の名僧でないと判別することができない。本当のサトリというものはお経の語義の中にあるのではない。あなたは「一燈園は宗教でない」と言われましたが、一燈園でも立派な宗教です。「生長の家」もまた見方によれば宗教です。宗教というものはお経の文字の講義をしたり講義を聴いたりすることではない。

道に随したがった生活をするのが宗教的生活で、道というものを指し示す教えが宗教である。道は必ずしも何々教というものの中にはない。何々教という立派な名義の中にいて、お経やバイブルの講義をどんなに立派にしても、道はずれた行ないをする人は宗教家とはいえない。それは宗教業者です。既成宗教はだめだという声が聞こえるのもそのためである。既成宗教がだめなのではない、宗教業者が宗教を形ばかりにして生命のないものにしたのです。これに反してお経の一字をも解釈しえないでも、道になつた行ないをする人は宗教生活者です。だから宗教の開祖にはずいぶん無学な人が多い。天理教祖でも、金光教祖でも、大本教祖でも、みんな無学である。無学の人が「道」になつた行ないをした。そこで無学の人と、天地に満ちている「道」とが一体になつた。そこで「道」というものが、その無学の人を通して真理の響を奏でる、これが宗教おしえというものです。教祖が無学な場合には一絃琴げんきんのような簡単な言葉で「道」を説かれた。しかし「道」というものは、天地にミチ、すべての人の真心の内にミチているので、真心をハッキリさせている人なら必ず共鳴する。そこで多数の人々が共鳴して信者となつて集まつて来る。集まつた人々のなかに学者があれば、教祖が簡単な単純な言葉で伝えられた「道」をいろいろ学者ぶつたありがたそんな複雑な言葉で説明する。そこで表面はますます厳いめしくなり、立派になつてくるけれども、それを説く人の生活が道になわなないと、だんだん、本当の「道」が奥の方に埋もれてくるのです。

はじめに権威のあつた宗教がだんだん権威がなくなつてくるのは、たいていそういう経路をとるものです。

谷口——昔からいろいろの宗教がある。それはどの時代にもいろいろの人間がありその性質や素養や傾向がちがっている。それで、神はおのこの時代の、いろいろの種類の人間に向くようにいろいろの教えを、それにふさわしい人物をとおして天降あまくだされるわけですねえ。甲の宗教で救われぬ人も、乙の宗教では救われる。甲の宗教ではどうも説き方が古めかしくてピツタリ心に来ぬという人のために、また新しい乙の宗教が出現して来る。もとの救いの神は一つであつても、救われない人間の種類がいろいろあつて、そのいろいろの人間の魂がどうぞぜひとも救つてくださいと暗黙のうちに神を呼んでいる。「求めよ、さらば与えられん、呼べよ、答えん」ですなあ。神は人間の魂の切なる求めの声を聴いて、そのいろいろの人間にふさわしい救いの放射光線を天上から投げかけられる。この救いの放射光線とも靈波ともいふべきものを靈眼で見れば、その姿が象徴化されて天てんの使つかいの姿にも見えれば、古代の装束をつけた神々しい神様にも見える。その救いの靈波の意味を感じてわかりやすく人類に伝えるのがいろいろの宗教の教祖です。いずれも救いの神はもとは一つ、求める人間がちがっているから、いろいろの教えが出て来るのです。

## 第五章 恋愛・相性・方位・家相

——これは当然であります。ところが病気とか不幸とかを起す念は妄念ちやうねんであるが、妄念に捉われている人から観れば厳然たる存在でありますのは夢見ている人にとつて夢が確乎かくこたる存在であるごとくであります。真理の上から言えば根底のない存在であります。なぜなら神はそのような病気とか不幸とかを造り給わないから、それを起す念も真存在しんそんざいではなく、偽存在ぎそんざい、空しき虚きよの念ごころ、妄念なのであります。だから真理を知り、自分の生命が神の子であつて自性円満なものであるという実相を自覚すれば、業ごうの流転るてんから超越することになるのです。そうなりますと、その人の運命は観相家が観ても当たらない、姓名判断の大家が観ても当たらない。自分の「生命」が自由な真理の世界へ出て過去に捉われない自由創造を続けてゆくからです。この自由創造の働きとして人相もそれに追隨して変わってくることもあり、姓名も自然に変えたくなり、変わってくることもあります。ある名優は舞台上で上演する役々によつて、この肉体の人相の上にも實際の変化を及ぼし、敵かたきやく役をやつたのちには舞台を下りて数時間のちまでも悪い人相をもちつづけ、善役を演出したのちにもまた舞台を下りて数時間その善き人相をもちつづけるので、観相家を驚かすことがあります。ある名優が知人の観相家を訪れたところが、その名優が危険身に迫るような人相をあらわしているので、観相家はそれを相手に言つてあげようか、言つてはかえつて気を悪くしていけないだろうと、とつおいつ思い惑まどつてそ

れを言わずにいたところが、また、次の日にその名優がその観相家に出会つた。観相家がしげしげ相手の顔を見るとその名優は前日に引きかえ今日は非常に寛厚かんこうな善い人相をしているのである。あまりその変わり方が激しいのでますます不思議に思つて、現在の人相の非常に善いこと、前日会つた時は非常に人相が陰悪であつたことを話すと、「あの時には舞台上で悪役をしていましたが、今は忠臣蔵の蔵之助をしているからです」とその名優が答えたそうです。これは小林参三郎氏の著『自然の名医』中に載せられている実話です。この例でもわかるように人相は固定したのではなく、精神内容の変わるに従つて変わるものです。この現在悪しき人相をしている人も悲観するに当たらず、善き人相をしている人も慢心するに当たらないのです。家相でも地相でも同じことで、ちよいとした樹木の植え方、石燈籠の位置、家具の列べ方などの変化によつても善い家相が悪くなつたり悪い家相が善くなつたりするものですが、それを一所懸命に研究して善い家相の家に移転しようと頑張つてみたところが、自己の精神内容が貧弱であり、善い家相に住むに相応しい精神内容に達していない時には、善い家相の家が見つかつても移転できない事情が生じたり、たとい移転できましてもちよつとした造作の具合で、善い家相もその実、悪い家相になつていて、それが心づかなかつたりするものです。心をあとにして形ばかりを追うている者は、とんだ失敗を演ずるものです。心が整い、自然に人相のよくなるような人は、また自然に善い家相に住むように事

情が運って来、善き家相の家が詭<sup>あつら</sup>えたように見つかるのか、今までの家に住んでいても、自然に、物のならべ方や造作の仕方などにも、生き生きとした光明が見えて来、家相が一変してしまうのであります。だからこの変化はどこまでも真理を知った上での自由創造の働きとしてそうなってくるのでなければ力がありません。「人間の生命は形に縛られるものだ」という迷いに捉われている結果、姓名を変えられるような方は、いかに姓名を変えてもやはり不幸が付随しますので、この姓名も欠点がある、あの姓名も欠点があるといつて、始終転転として姓名を変えながらなお安住を得ないで、その不安の念がさらに次の不幸を起す集積となることがあります。姓名が「生命」を支配するのではなく、あらゆる形象は「生命」が進軍して行く際に周囲に投影した念の影でありますから、「生命」こそ主なのであります。生命の自由創造として人相が自然変わるならば、それもよろしい。生命の自由創造として善い家相に住むようになれば、それもよろしい。生命の自由創造として改名したくんだり新しい屋号<sup>やごう</sup>や仮名<sup>かめい</sup>や雅号<sup>がごう</sup>をつけたくなるならば、それもよろしい。しかしいかなる場合にも、われらは「生命」が主であつて、いっさいの形相は従だということを知らなければなりません。